



Nippon, Erster Band. Leyden, 1852.
(本学図書館所蔵)

蘭癖大名としての中津藩主昌高と福岡藩主長漣

この会見に同席した昌高は、既に親交があった過去の商館長ヘンドリック・ドーフからフレデリック・ヘンドリックというオランダ名まで貰っており、文化七（1810）年に蘭通詞の馬場佐十郎の監修で『蘭語訳撰』を作っていました。さらに、十二年後には続編とされる『バスタールド辞書』を刊行していたほどで、この時代屈指の蘭癖大名でした。昌高の義理の祖父にあたる奥平昌鹿は、藩医である前野良沢らの『解体新書』の翻訳事業を支援した人物であり、昌高の長子で重豪の孫にあたる昌暢も江戸時代後期のオランダ商館長と交流を持ちます。こうした中津藩の伝統的な向学心は、やがて明治時代の先覚者である福沢諭吉を輩出することになります。

また、この会見の席には列していませんが、重豪の九子で福岡藩主の黒田長漣（斉漣）も蘭学に関心が高く、シーボルトが帰国に際し禁制品であった地図を持ち出そうとして発覚した所謂シーボルト事件⁽¹⁾が起こる五か月前の文政十一（1828）年三月に彼と長崎で会っています。この長漣は重豪の曾孫である島津斉彬の大叔父にあたりますが、年齢は斉彬より二歳年下になります。しかし、斉彬と共に江戸の重豪の教えを受けて育ち、同じように蘭学を学んだ関係上、後に斉彬の薩摩藩主への襲封を助けます。政策面では医学や軍事に蘭学を積極的に採り入れ、中洲近くに精錬所作りを試みています。さらに、世が明治に移ると長漣はシーボルトの罪の部分よりも功績を称えて、記念碑の建設に奔走するほど彼を敬愛していたようです。

幕末薩摩藩の基礎を固めた斉彬

島津宗家を継ぐことになる斉彬が、重豪に伴

われてシーボルトに会ったのは十八歳の時でした。その後、江戸で研鑽を積み、多くの蘭学者と交流を持ちました。早くから藩主就任を期待されていましたが、相続をめぐるお家騒動もあり斉彬が二十八代当主として藩主を襲封したのはアメリカのペリー提督が来航する二年前の嘉永四（1851）年でした。年齢は四十二歳を数え、重豪が八十九歳で世を去って十八年を経ていました。

斉彬は蘭通詞を育成して蘭学の普及に励むと共に、集成館と呼ばれる工場を作り、反射炉や溶鉱炉、鉄鋼、軍事など今でいう重厚長大産業から、農機具、陶磁器、ガラスなどの生活必需品までを生産し殖産事業の展開を図ります。また、重豪と同様に自分の養女である篤子を十三代將軍の徳川家定に嫁がせるなど、政治的な手腕も発揮しはじめました。ところが、斉彬は藩主となって七年後の安政五（1858）年に四十九歳で突然に他界してしまい、集成館事業の発展も彼の死に伴って力強さを失いました。しかし、斉彬のもたらした薩摩藩の活力は、やがて討幕運動を経て明治日本の近代化へと繋がっていきます。

重豪が期待したもの

このように、重豪の感化を受けた薩摩や薩摩出身の大名たちは蘭学に精通しました。子供や曾孫をシーボルトに引き合わせた老土重豪は、鎖国という大きな壁の中で、西洋の知識人シーボルトを通じて広い世界の雰囲気を感じさせることを意図し、さらに蘭学という学問体系から発展する繁栄を心に描いていたものと思われます。

重豪が果たせなかった夢を、子から曾孫たちが志を受け継いで蘭学に基づく諸事業を实践したことによって、重豪の思いが見事に実現したのではないのでしょうか。

註

- (1) この事件は十数人にのぼる日本人処分者を出し、シーボルトは国外追放となるが、安政五（1858）年の日蘭通商条約締結後に許されて再来日し、幕府の外交顧問に就任した。しかし、この人事に対する反対意見が根強かったことから、彼の職務は長くは続かず、退任後の文久二（1862）年に帰国した。

参考文献

- 呉秀三訳注『シーボルト江戸参府紀行』（異国叢書）改訂復刻版 雄松堂書店 昭和41年。
芳即正著『島津重豪』（人物叢書）吉川弘文館 昭和63年。
日蘭学会編『洋学史事典』雄松堂 昭和59年。

おく まさよし（司書・図書館事務長兼管理運営課長）